

# 論文内容の要旨

申請者 江見 香月

認知症の母親を介護する息子の体験

Sons' Experiences in Caring for Their Mother With Dementia

## I. 研究の動機と背景

日本の高齢化率は 28.9%に達し、75 歳以上の人口は女性が 60.7%と多く、要介護認定を受けた女性高齢者の 19.9%は「認知症」が原因で最多である（内閣府, 2022）。一方、主介護者の子の割合は全体の 20.7%で、子のうち息子は 34.0%であるが、2014 年から 4 年間で息子の割合は 2.7%増加し、息子による介護が増えると考えられる（内閣府, 2018, 2020）。訪問看護師を長年行っていた研究者は、認知症の母親を介護する息子たちが、母親について家事や排泄ができなくなったと何度も口にすることに疑問を抱いていた。ある時、別の認知症の母親を介護する息子から母親の変化を「受け入れられない」という言葉を聞いた。その時、研究者が関わった息子たちも、自分の理想の母親像が崩れていくことを受け入れられないと伝えようとしていたのではないかと考えた。先行研究でも、息子は客観的に母親を認知症の「患者」と捉える一方で、「親」としての母親像がよみがえり、「患者」と「親」との間での葛藤を抱くことが指摘されている（横瀬, 2010）。特に、息子は異性である母親への排泄介助に抵抗感が強く、排泄を失敗した母親に感情的な言動に至りそうな心情と背中合わせで介護していることも明らかになっている（松井, 2014）。しかし、息子が認知症の進行により変化する母親をどのように捉えて介護をしてきたのか、息子の母親への思いや感情などを含めた体験については明らかにされていない。そのため、認知症が進行していくことにより変化する母親を息子はどのように捉えて介護しているのか、息子の視点から明らかにする必要がある。

## II. 研究目的

認知症が進行していくことにより変化する母親を、息子はどのように捉えて介護してきたのか、その体験を明らかにする。

## III. 研究方法

研究デザインは質的記述的研究デザインで、研究期間は予備調査も含めて 2020 年 7 月 8 日～2023 年 3 月 31 日であった。研究参加者（以下、参加者と記す）は、同居の有無を問わず、認知症の母親を 6 か月以上、主に介護した経験のある 40 歳以上の息子とした。デー

タ収集方法は、Riessman（2008/2014）のナラティブ・インタビューをもとに、母親が認知症と診断された頃から在宅療養が終わるまで、認知症の進行により変化する母親をどのように捉えて介護してきたのか、自由に語ってもらった。データ分析方法は、Riessman をもとにテーマ的ナラティブ分析を行った。分析過程では、研究指導者や老年看護学教員等からのスーパービジョンを受け、分析の信憑性を高めた。倫理的配慮として、日本赤十字看護大学研究倫理審査委員会から承認を受けた（番号：2019-102、2021-054）。

#### IV. 結果

**1. 参加者の属性：**参加者は40～60歳代の男性5名で、4名が長男、1名が次男であった。介護期間は2～11年、インタビュー実施時の仕事は常勤1名、非常勤3名、無職1名であった。母親の年齢は70～90歳代で、介護度は要介護1～4であった。インタビューはWeb会議システムが2名、対面が3名であった。回数は5名とも各2回、時間は1回53分から3時間10分で、合計時間は15時間38分であった。

##### 2. 認知症の母親を介護する息子の体験

**1) Aさんの体験：**独居の母親が頻繁に頭痛を訴え受診すると、アルツハイマー型認知症と診断された。しかし、60歳代で長男のAさんは母親に伝えても忘れてしまうため、病名を伝えなかった。常に優しく物静かな母親だったが、徐々に物が無くなったと大声で繰り返しAさんに訴えるようになった。独居が難しいと判断したAさんは、母親を遊びに行くと騙して姉に託すことにした。約3年後、母親は姉の家から夜中に外に出たり、通所介護を大声で拒むようになり、姉が介護疲れを長男のAさんに訴えた。Aさんは母親を引き受けるかどうか葛藤したが、妻の承諾で母親を引き取った。その後、不穏状態のまま同居した母親が受診による向精神薬の増量で落ち着いたことがAさんの介護の支えになった。しかし、母親は失禁を繰り返し、妻に遠慮する母親のためAさん自身がやらざるを得ないと排泄介助をした。Aさんが限界を感じていた頃、施設からの通知で母親を入所させた。

**2) Bさんの体験：**40歳代の長男のBさんは母親の物忘れを察していたが、ようやく物忘れ外来に受診できたプライドの高い母親が衝撃を受けることを恐れて、アルツハイマー型認知症と伝えなかった。同時期に父親も癌の診断を受け入院となったため、Bさんは独居となる母親に同居の確認をしたが、父親の近くにいたいと希望した。Bさんは姉と交替で月2回週末に実家に通って遠方から支援した。父親の死後、仕事と育児で母親の元に通い続けることが厳しいと感じたBさんは母親を引き取ることを考えたが、母親は地元で暮らしたい思いが強く、父親の死も忘れて父親の傍にいたいと訴えた。しかし、予測できな

い行動をする母親に心配が尽きない Bさんは、安全を考慮すると独居は限界だと悟った。最終的に、Bさんは住み慣れた自宅で暮らしたい母親の思いを尊重できずに近所の施設に母親を入所させたが、自分の決断が正しかったのかどうか葛藤していた。

**3) Cさんの体験：**60歳代で長男のCさんは、1か月前に自宅で転倒した母親の様子がおかしいと受診すると、慢性硬膜下血腫との診断で手術を受け、同時に脳血管性認知症も診断された。退院後、独居の母親が心配になったCさんは、弟と交替で泊まって数か月間様子を見ていたが、仕事のため近所のCさん夫婦が同居することにした。しかし、同じ話を繰り返す母親にCさんは苛立ち、そんな母親を受け入れられなかった。元気な頃の母親の姿を知るCさんは、産み育てた息子もわからなくなった現在の母親に衝撃を受け、懸命に介護する妻に文句を言う母親に怒りも感じていた。一方、Cさんは聴力の低下と言葉の理解に難しさがある母親を「首から下は元気」と繰り返し、身体的な能力がまだ残っていることを介護の支えにしていた。戦後、仕事や家事の一切を担った母親の背中を見て育ったCさんは、一生懸命働いてきた母親を家で看取りたいと考えていた。

**4) Dさんの体験：**認知症の父親の受診時に自覚のないまま母親が認知症と診断された。50歳代で同居している次男のDさんは、家事全般を担っていた母親が認知症になることは衝撃で納得できなかったが、父親の介護の経験から受け止めようとしていた。その父親の認知症が重度になり、母親が一人で行っていた介護にDさんも参加するようになった。父親の死後、妻の役割を失った母親の変化に認知症の進行を感じる一方で、母親の中で妻としての務めを果たし終え、緊張感が無くなったとDさんは感じた。そのため、通所介護を母親に勧めたが、母親は初日途中で帰宅して以来、全く利用することはなかった。これまで母親の育て方に反発し自分の意思を貫いてきたDさんは、当時の母親の立場を理解し、自分と同様に母親の意思も尊重したいと通所介護を断念した。車庫に他の車が勝手に停まっているとの訴えには、Dさんには付き添うことで母親は納得し落ち着くことがわかってきた。今後も、母親の記憶が一番残っている家で介護を続けたいとDさんは考えていた。

**5) Eさんの体験：**80歳代を過ぎた母親が長年継続した学習教室を突然辞めると言い、60歳代で長男のEさんは気持ちが揺らいだ。その後、独居の母親がぼんやりしていることから、妹から依頼されてEさんが母親を受診させアルツハイマー型認知症と診断された。Eさんは病名を伝えないまま教師だった母親に書字を勧めたが、母親は全く関心を示さなかった。子供の頃から学習教室で多忙な母親から気にかけてもらえなかったと思うEさんは、成長するに従い母親とは疎遠になった。しかし、認知症が進行して日常生活が難しく

なっている母親を目の当たりにして人として世話してあげたいと、仕事のない週末に母親の元へ通った。今まで最小限の会話しかしてこなかった母親から、初めて戦時中の恐怖体験を聞いたEさんは、自分の子どもよりも学習教室や奉仕活動に力を入れていた母親についてもっと理解できたのではないかと後悔していた。

## V. 考察

**1. 息子が母親の介護を引き受ける意味：**参加者の多くが長男であり、親の面倒は長男が看るべきとの地域の文化や規範とともに、参加者自身も認知症で独居の母親の介護を引き受ける責任を感じていた。しかし、家庭のある参加者が母親を引き受けることは、妻への様々な負担も配慮しながら決める必要性もあった。また、戦後昼夜もなく一生懸命働いてきた母親の背中を見て育ってきた参加者の中には、母親への感謝の思いから介護を引き受ける者がいた一方で、子どもの頃の母親に複雑な思いを抱いていた参加者は、日常生活に支障をきたしている母親を目前に人として介護したいと考えるようになっていった。

**2. 認知症の母親を介護する息子の葛藤：**多くの参加者は、認知症の診断を母親に伝えるかどうか悩み伝えなかった。それは自身も母親の認知症の診断に衝撃を受けていると考えられ、衝撃を受けた母親と感情的に向き合うことを回避したい思いもあったと考える。しかし、認知症と母親に伝えないことは、認知症の進行によりこれまでの母親の生活を維持できなくなった際に参加者を悩ませることになった。母親の代理で生活の場所を決定しなければならない参加者は、母親の意思に沿った生活の場所を決定できないことに罪悪感を抱いていた。一方、認知症が進行した母親を同居して支えようとした参加者は、大切な妻に向けられた母親の言動に対する自身の感情に直面し、息子として母親の介護役割と、妻を守る夫としての役割間の葛藤、母親と妻と自身の関係における葛藤を体験していた。

**3. 介護を通して得た母親への捉え直し：**母親に対する複雑な感情を抱えたまま介護が始まった参加者もいた。今まで自分の意思を大切に生きてきた参加者は、意見が合わなかった母親の背景を考慮した上で、その意思を尊重して介護を行いたいと考えていた。また、認知症が進行して戦時中の恐怖の記憶が残っていた母親から戦時中の体験を聞いた参加者も、母親の言動の背景を知ることとなった。これらの参加者は、母親の介護を通して改めて母親と向き合うことで、これまでの母親の生き方や価値観を振り返り、目の前の母親の姿に重ねて、母親を捉え直していた。このような母親への捉え方の変化が、母親の介護を継続することや、認知症が進行して失われやすい母親の尊厳を守る息子の志向と行為に結びついていたのではないかと考える。